

心に深刻な傷跡

拉致監禁で棄教を迫られ、心に深い傷を負った人の中には、心的外傷後ストレス障害(PTSD)を発症するケースもある。

PTSDは戦争や災害、犯罪の被害などで強い恐怖感を体験したことで、繰り返し思い出したり(フラッシュバック)、体験した場所に近づけなかったり、不眠やイライラする状態が続く精神的な障害だ。自然に治る場合もあるが、長期化することもあり、効果的な治療法は確立されていない。

拉致監禁被害者が負う心の傷の原因は、単に長い間狭い部屋に閉じ込められたというだけではない。それだけでもPTSDを発症させ得るショック体験だが、被害者の精神障害をより重症化させるのは、強制棄教が自己のアイデンティティーの根本に関わる信仰への破壊行為だからだろう。

衝撃的な体験から、「家族からレイプされたような傷が残っている」とまで語る人が複数いるほどだ。

◇湿疹や過覚醒状態に

故・宿谷麻子さんも、後遺症に悩んだ一人だった。宿谷さんは約4カ月半、両親らによって拉致監禁され、統一教会(当時)を脱会した。拉致監禁をする側から見れば「成功した人」である。



旧統一教会の施設に集団で乗り込んできた人たちに拉致された様子の再現。被害者(手前左)はドアにしがみついて抵抗したが連れ去られた

監禁被害者、PTSD発症も 不眠やイライラ、恐怖心

ところが、宿谷さんの悲劇は脱会後から起こった。全身にアトピー性皮膚炎(湿疹)が広がり、起きている時は脳が異常に興奮する過覚醒状態を繰り返した。

「最初の頃は、カルトから脱会した者の後遺症だと(キリスト教牧師らから)思い込まされていた」と宿谷さん。だが、心療内科で診断した結果、「拉致監禁によるPTSD」だと分かった。その後は睡眠導入剤や精神安定剤など一日に15錠にもなる薬の服用が欠かせなくなった。

強制棄教によるPTSD発症の割合はどれくらいに上るのか。この分野の研究がほとんどない中で、医学雑誌『臨床精神医学』第29

巻第10号(2000年10月発行)は池本桂子、中村雅一両氏による「宗教からの強制脱会プログラム(デイブログラミング)によりPTSDを呈した1症例」と

いう研究報告を掲載した。監禁がPTSDを発症させる条件となることは広く知られているが、このケースでは自己決定権の剥奪もトラウマとなる可能性が指摘されている。

◇10年にわたる後遺症も

また、この中で両氏は宗教学者ルイス氏らの研究に言及し、「強制的に脱会カウンセリングを受けさせられた36人のうち、61%に意識の浮遊や変容状態、47%に悪夢、58%に健忘が生じ、こうした異常は、自発的に脱会カウンセリングを受けた人では発生頻度が低い」としている。

短くとも数カ月、長い場合には10年以上にわたりPTSDに悩まされる人がいる。解放後も長く続く精神的な被害とその苦痛は、まさに拉致監禁の悪質さを物語っている。



拉致監禁によってPTSDやアトピーの後遺症に苦しんだ故・宿谷麻子さん